令和４年度　実態調査　第１学年の結果と考察　　調査人数 49,964 人

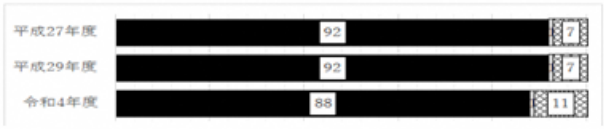
1　なん時（じ）　なん分（ぷん）　ですか。

(1)

こたえ　３ 時 25 分

(2)

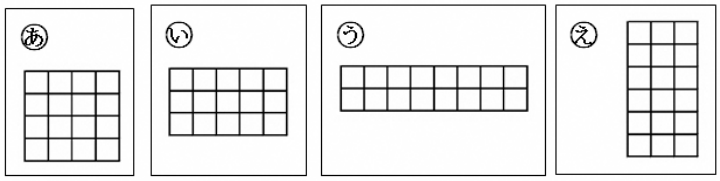
こたえ　９ 時 56 分

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は、アルファベット順とする。				
1	（1）	A	C1		C2	
		正答	5 時 17 分		左記以外の誤答・無答	
	（2）	A	C1	C2	C3	
		正答	10 時 56 分	9 時 55 分	左記以外の誤答・無答	

1　時計に表された時刻を、正確に読むことができるかをみる問題である。（１）は３時 25 分と正しく答えられた児童が 88%いるのに対して、（２）は９時 56 分と正しく答えられた児童は 63%と低く、（１）と（２）を比較すると、（２）の正答率が 25%も低いことが分かる。（２）の誤答では、９時 56 分を 10 時 56 分と読み間違えている児童が 11%いた。このことから、時計を読み取るときに短針に近い数値を読み取ってしまっている児童が多いことが分かる。時計の仕組みを正しく理解させるとともに、時計の時刻を読み取る経験をなるべく多くさせることが必要である。

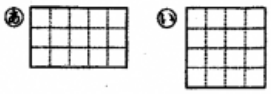
授業では、デジタルコンテンツを活用しつつも、実際に手元で時計を操作する活動を多く取り入れ、長針と短針が指す時刻を正確に読み取れるようにさせたい。また、学校生活の中でも授業の開始や終了の時刻など、日常的に時刻を意識させたり、（２）のような「もうすぐ〇時」と言った時刻を読み取ったりする活動を積極的に行うようにする。テレビやタブレットなど日常的にデジタル時計を目にしている児童も多くいるので、デジタル時計とアナログ時計を隣に並べて時刻の確認をするなど、時計の読み方について理解が深まるよう児童の実態に応じて工夫して指導を行いたい。

2　おなじ　タイルを　ならべて　ひろさを　くらべます。



※平成 29 年度までの問題

2　ひろさを　くらべました。　あと いでは　どちらが　ひろいでしょう。



こたえ　い

(1)　おなじ　ひろさは　どれと　どれで　しょうか。　こたえ　あ と う

(2)　いちばん　ひろいのは　どれですか。　こたえ　え

問題		評価基準及び割合（%）　※割合は、アルファベット順とする。		
2	（1）	A	C	☆令和4年度
		正答	誤答・無答	
	（2）	A	C	☆令和4年度
		正答	誤答・無答	

【年度の横の記号は、☆：今年度より新設した問題】

2　任意単位を用いた広さの比べ方を理解できているかをみる問題である。新学習指導要領の改訂に伴い、問題の一部を変更した。平成29年度はあといの２つで広さを比べる問題を出題しており、正答率は91％と高かった。今年度から問題に使う図を４つに増やし、出題数も「同じ広さ」と「一番広い」の２つにした。その結果、（１）の同じ広さの図形を問う問題では、正答率が79％であり、（２）の一番広い図形を問う問題では、正答率が83％であった。このことより、児童が広さを比べる場合において、マス（任意単位）を数えて正答を導いている児童もいるものの、直感や見た目のみで広さを比べている児童もいるのではないかと考えられる。

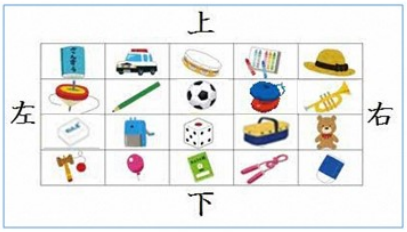
指導の際には、まず具体的な量の大きさを比べる活動を多く取り入れ、直接比較や間接比較を行ったうえで任意単位での比較に移りたい。さらに、児童が目的に応じて比べ方を選ぶことができる力を伸ばすために、具体物を比べる時には「なぜ、その方法を選んだのか」ということも併せて表現できるようにしていきたい。

3　たなに　ものが　はいっています。はいっている　ばしょは　どこでしょうか。

□に　あてはまる　かずを　かきましょう。

また　（　　）の　なかの　ただしいほうに

○を　かきましょう。



(1)　えんぴつけずり　は

上から　３ばんめ、左から　2　ばんめにあります。

(2)　こくばんけし　は　下から　２ばんめ、

（　左　・　右　）から　4ばんめに　あります。

(3)　サッカーボール　は　（　上　・　下　）から　　ばんめ

左から　３ばんめに　あります。

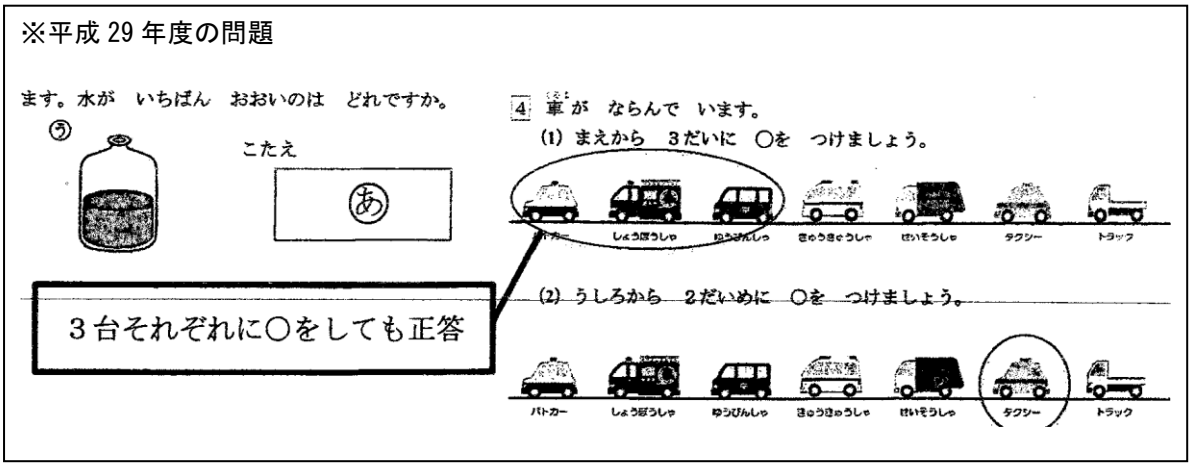
上・２または下・３

問題		評価基準及び割合（％）　※割合は、アルファベット順とする。		
3	（１）	A	C	
		正答	誤答・無答	☆令和4年度　85　15
	（２）	A	C	
		正答	誤答・無答	☆令和4年度　76　24
	（３）	A	C	
		正答	誤答・無答	☆令和4年度　81　19

【年度の横の記号、☆：今年度より新設した問題】

3　この問題は学習指導要領の改正に伴い、新設したものである。児童が方向や位置を表す言葉を用いてものの位置を適切に表現できるかをみる問題である。正答率は（１）が85％、（２）が76％、（３）が81％と、どれも決して高くない。二次元で方向や位置を表す際には、上下・左右など、二つの要素を基準として表現する必要がある。（１）のように先に基準が示されている場合は正しく数を読み取ることができると考えられる。（２）では、問題には「左から４ばんめ」とあるが、右から数えた方が、数が小さいため、近い方を選んだのではないかとも考えられる。（３）では、自分で基準を決めてから表現できるかどうかをみる問題だが、（１）のように基準が決められている場合と比べると正答率が下がってしまうことが分かる。さらに、全体を通して正答率が低い理由として、絵が見づらかったため、正答できなかったのではということや、児童がこの形式の問題に慣れていないということも考えられる。

指導の際には、方向や位置を表す言葉を用いて表現するだけでなく、「何を基準にして位置関係を表しているのか」ということを児童自身に決めさせてから表現をする活動や、一つの位置を複数の表現で表す活動を取り入れることが必要である。



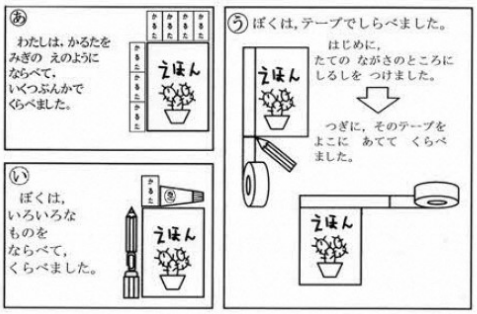
問題		評価基準及び割合(%)　※割合は、アルファベット順とする。			
4	(1)	A	B	C	
		正答	ゆうびんしゃにのみ○	左記以外の誤答・無答	
					平成27年度 98 / 2
					※平成29年度 65 / 32 / 4
					令和4年度 73 / 23 / 4
	(2)	A	C		
		正答	誤答・無答		
					平成27年度 94 / 6
					※平成29年度 86 / 5 / 9
					令和4年度 82 / 18

【年度の横の記号※は問題に変更を加えたものです。】

4　数が順序や集合、位置を表すことを理解できているかをみる問題である。(1)の正答率は 73%、(2)の正答率は 82%であった。(1)の誤答として、「ゆうびんしゃ」にのみ○を付けた児童が 23%いたことから、「～から３台」と「～から３台目」の違いを十分に理解できていないと考えられる。(2)の誤答として、「トラックとタクシーの両方」または「しょうぼうしゃ」に○を付けた児童が見られた。(1)と同じように考えて「後ろから２台」に○を付けてしまったり、「前から２台目」と勘違いしたりしたのではないかと考えられる。

指導の手立てにもあるように、この２つの意味を指導した後で、教室の座席や整列した際に「○人目」(順序数) と「○人」(集合数) の違いを児童に体感させる「並ばせゲーム」などを取り入れ、２つの違いに慣れるようにしたい。また、前・後ろだけでなく、上下左右の言葉を使って表す活動も取り入れ、感覚的に理解できるようにしていくことが大切である。

5　えほんの　たての　ながさと　よこの　ながさを　くらべます。
ただしく　くらべられる　ほうほうは　どれでしょう。



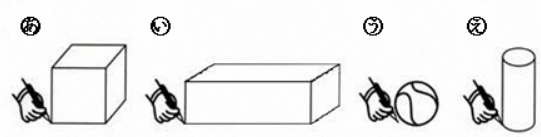
こたえ　う

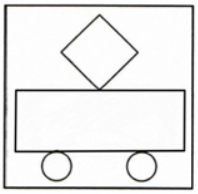
問題	評価基準及び割合(%)　※割合は、アルファベット順とする。			
	A	C1	C2	
5	正答	あ　または あと う	左記以外の 誤答・無答	平成27年度 70 21 9 平成29年度 71 19 9 令和4年度 77 13 10

5　直接比較ができない場面での、間接比較や任意単位による長さ比べが正しくできるかを確かめる問題である。正答率は77%と８割を切ってしまっているものの、過去３回の結果を比べると少しずつではあるが正答率が上がっているのが分かる。これは、任意単位で考える場合、同じ物でも辺の長さが異なる長方形である場合は何を単位として設定するのかを意識して指導が行われているためと考えられる。

指導の際は、黒板やランドセルロッカーの縦と横の長さ比べなど、「直接比較」(物を直接重ねるなどして量を比較する方法)ができない場面を意図的に設け、「間接比較」(紙テープなど何か他の物(媒介物)を使って比較する方法)を行う必然性のある活動を多く経験させるようにする。また、「直接比較」や「間接比較」を多く経験させたうえで、教室や廊下にある掲示板の長さや広さを比べる活動を取り入れる。生活経験から、「画用紙の横何枚分の長さ」や「画用紙が何枚分貼られた広さ」など、子供たちが「任意単位」を使いたくなる必然性のある問題場面を設定し、「画用紙の横の長さが８枚分の長さ」や「画用紙が 20 枚分の広さ」のように具体的な測定方法を説明させる活動を多く取り入れ、「単位」の理解を深めさせたい。さらに、長方形など辺の長さが異なる画用紙を用いることで、縦の長さを単位とするのか、横の長さを単位とするのか任意単位の設定について考える経験をさせるようにしていきたい。

6　つみきや　ボールが　あります。
かたちを　うつしとって　みぎのような　でんしゃの
えを　かきました。どれを　つかったでしょう。
ばんごうを　3つ　かきましょう。





こたえ　あ　と　い　と　え

問題	評価基準及び割合(%)　※割合は、アルファベット順とする。			
	A	C1	C2	
6	正答	う を含む	左記以外の 誤答・無答	平成27年度 81 12 7 平成29年度 82 11 7 令和4年度 84 12 4

6　目的に合わせて、平面の形を分解して捉えることができるかをみる問題である。完答は 84%であり、平成 29 年度から２ポイント上がっている。この問題は過去２回を見ると、少しずつではあるが正答率が上がっていることが分かる。

指導の際に、実際に様々な形の積み木やボールなどを活用して形の特徴をとらえたり、形を構成や分解する活動を通して特徴を言葉で表現したりするだけでなく、機能的な性質についても児童の理解を深めているからと考えられる。